

キャリア教育を意識した授業研究

－課題対応能力の育成を中心に－

学籍番号 (159984)

氏 名 (山下 剛史)

主指導教員 (岡 博昭)

1 日本におけるキャリア教育の背景

日本に初めて「キャリア教育」という文言が公的に登場したのは、平成11年12月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」であった。職業観・勤労観と社会的・職業的自立に向け、どの職業にも基盤となる能力を育てることがキャリア教育であるとした。しかし、従来日本では職業教育・進路指導の教育が盛んであったことから、勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られ、社会的・職業的自立のために必要な能力が軽視されてしまったことが課題であった。

また、筆者はキャリア教育の答申をもとに理科教育学会などに投稿されているキャリア教育に関する文献を調査し、整理を行った。その結果、職業観・勤労観を中心に行われている授業実践例に注目している実践事例が多く、社会的・職業的自立のために必要な能力を中心に行われている授業実践例に関しての実践事例は少ないことがわかった。

2 本研究の目的

日本におけるキャリア教育は、社会的・職業的自立に必要な能力を意識した実践例が少ないことが課題である。また、平成23年1月中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」に示された「基本的・汎用的能力」が、社会的・職業的自立のために必要な能力として明らかになった。そこで本研究の目的は、基本的・汎用的能力の中の課題対応能力に注目し、この能力を効果的に高められる学習理論を意識しながら授業開発を行い、その評価をするためである。

3 課題対応能力を高めるための学習理論

筆者は、課題対応能力を高めるためにアメリカのキャリア教育の中で有効性があるとされた学習理論である文脈教授・学習 (contextual teaching and learning 以下 CTL) を用いて授業研究を行うことにした。しかし、CTL の定義は研究者によって異なるため多岐に渡っている。そこで、松本 (2007) は、多くの文献調査に基づいて CTL の定義を以下の 3 つの特徴として述べた。

- ①学習者への動機づけのために社会的つながりのある職業をメインとすること。
- ②学習者が課題に対して活動的な授業であること。
- ③知識の習得だけでなく、今後の将来的な職業につながること。

筆者は、松本 (2007) が提言した CTL の特徴に基づき授業設計を行うことで、生徒たちの課題対応能力を高めることができるのではないかという仮説のもと、研究を行った。

4 実践①（コンビニを題材にした授業実践）

実習校である N 高校の学校設定科目に「ビジネス」という科目がある。ビジネス受講生は高校卒業後と同時に就職を希望している。まず職業的・勤労的に注目している「ビジネス」で実践させていただき、その成果をもとに理科の中で課題対応能力を高めることを目標にした。

実践①は、松本（2007）が提言している CTL の特徴を参考にしながら授業設計した。3 つの学習指導上の特徴の中で①（学習者への動機づけのために社会的つながりのある職業をメインとすること）・③（知識の習得だけでなく、今後の将来的な職業につながることを意識した授業設計を行った）。

題材は、生徒たちにとって身近なコンビニである。生徒たち自身がコンビニの店長になったと想定し、課題である地図内のどこに出店するかを考える授業である。出店にはさまざまな条件が必要になり、分析などの課題対応能力が必要になる。

事前に作成したループリックを用いて、生徒の成果物を評価すると、松本（2007）が提言している CTL の特徴を意識することで生徒たちの課題対応能力は高まることがわかった。

5 実践②（洗濯を題材にした授業実践）

実践②は、松本（2007）が提言している CTL の特徴である②（学習者が課題に対して活動的な授業であること）を意識した理科の授業設計を行った。

題材は、生徒たちにとって身近な洗濯である。生徒たちが活動的な授業を行えるように新たなセッケンの教材開発に取り組んだ。汚れを落とすために使用する洗濯用セッケンや合成洗剤では、衣類の材質を変えることでどのような影響を及ぼすかという課題を与えた。生徒たちは、課題に対して事前の実験データをもとに班で予想し、予想に対して実験で証明した。

教材開発に時間がかかってしまい定性（質的）評価を行えなかった。しかし、筆者はワークシートの感想欄や班での予想シート、先生方のご高評から課題対応能力は高まったのではないかと考えた。

6 まとめ

松本（2007）が提言した CTL の 3 つの特徴を用いることで課題対応能力は高まることがわかった。3 つの特徴を一度の授業に取り入れる必要はなく、単元を通して系統的にカリキュラム設計することが重要になってくる。また、課題対応能力を高めるためには、生徒たちの実生活に関係している課題を設定することが重要になってくる。本実践では「コンビニ」「洗濯」を題材にした。より生徒がイメージしやすく、実生活に関係している課題を設定することで生徒たちは有意義性を感じ、学習に参加する。

今後は、定性（質的）評価の質を高めるとともに、事前・事後の定量（量的）評価をすることで、CTL を用いた授業設計が課題対応能力をどのように高められるか研究を進めたい。